

足利市神畑遺跡出土の石剣について

せり ざわ せい はち ご とう しん すけ
芹 澤 清 八 後 藤 信 祐

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1 はじめに | 4 石剣の観察 |
| 2 神畑遺跡について | 5 栃木県内の緑泥片岩製の石棒・石剣 |
| 3 石剣出土の第 21 号住居跡の概要 | 6 まとめ |

平成 23 年度刊行の発掘調査報告書に掲載できなかった神畑遺跡の緑泥片岩製の石剣を紹介し、栃木県内の緑泥片岩製の石棒・石剣を概観した。神畑遺跡の石剣は晩期前葉の竪穴住居跡から出土しており、表裏に片理面、剥離面を大きく残す短冊形の完形品で、晩期前半に産出地である埼玉県北部を中心に分布する粗製石剣の外縁の資料と考えられる。

また、緑泥片岩製の大形石棒は、中期後半から後期前半に県内各地で出土しており、中期後半から後期初頭には石剣状の小形石棒、後期前葉には無頭の小形石棒が併存している。晩期前半の緑泥片岩製の石剣は精製・粗製の二者があり、精製石剣は数が少ないが県北まで分布するものの、粗製石剣は県南までである。そして晩期中葉には緑泥片岩製の石剣は姿を消し、粘板岩を素材とした石剣に移行する。

1 はじめに

今回ここに紹介する石剣の資料は、本来であるならば既に刊行済みの『神畑遺跡発掘調査報告書』（芹澤 2012）に掲載すべきであったが、調査段階から住居跡内出土として重要に扱い過ぎたことが逆に資料の紛失を招いてしまった。そのため、報告書に掲載されることなく長らく所在不明であったが、埋蔵文化財センター収蔵庫の再整理が実施されたことにより、報告書発刊から 4 年をおいて再び調査担当者の手に戻ることもとなった。

調査担当者として、考古学上極めて重要な資料を紛失という理由で報告書に記載できなかったことは、非常に恥ずかしく非難されるべき問題である。さらに、発掘調査及び整理・報告書作成費用の提供をいただいた東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）、また県内の出土資料を保管・管理する立場にある栃木県教育委員会に対しても、誠に申し訳ない気持ちでいっぱいである。

資料は石材に緑泥片岩を用いた石剣であり、尚且つ出土土器から構築時期が明確な住居跡出土である点は極めて重要である。改めてここに頁をいただき、報告するものである。

2 神畑遺跡について

足利市菅田町地内に所在する神畑遺跡の詳細については、既に発刊されている栃木県埋蔵文化財調査報告第 352 集『神畑遺跡―北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告 XX III―』（芹澤 2012）を参照されることをお願いするが、ここでは神畑遺跡の縄文時代にかかわる遺跡の特徴を簡単に解説し、報告する石剣が出土した住居跡や相伴関係にある出土遺物等について簡便に記載することとする。

調査の原因は既に述べているとおり、北関東自動車道建設に伴って平成 16 (2004) 年 4 月から 12 月までの 9 ヶ

月間行われ、報告書はその7年後の平成23年度に作成した。遺跡は隣接する古墳時代の小区画水田跡が発見された菅田西根遺跡と同一面にあることから、一部にロームが存在するものの低地に営まれていると言える。なお、低地との関連として、遺跡内には縄文時代後期以前に存在した旧河道が発見されている。この河道内からは「ケズリ」や「ホゾ穴」などが施された住居跡構築材が出土しており、その放射性炭素年代（暦年校正）も縄文時代後期中葉から晩期前葉の年代を示している。

調査区内より発見された縄文時代にかかわる遺構は、堅穴住居跡及び土坑が各々 3 基と僅少であったが、これらが位置する地域では遺物を多量に含む包含層が発達している。包含層からは、遺構内出土を含め 34,652 点（土器 13,587 点、石器 21,065 点）におよぶ遺物の出土があり、土器は後期後半から晩期前半のものにほぼ限定される。石器は出土点数の約 95% がチップ・フレイク及び礫であるが、所謂 tool として認定したものも 1,135 点出土している。中でも石鏃とその未製品や欠損品が 553 点あり、石核に利用されたチャートの垂角礫も 216 点出土している。縄文時代晩期になると、石鏃の大量出土が各地の遺跡で目につくが、神畑遺跡においても同様な状況が窺える。

3 石剣出土の第 21 号住居跡について

ここでは、石剣が出土し第 21 号住居跡について、住居跡の位置や形状、また出土遺物やその状況について概略を述べることとする。



第1図 神畑遺跡第21号住居跡と出土土器（報告書より）

神畑遺跡の調査区内には南北に掘り込まれた水路が2本存在し、これによって区分された調査区を東から便宜的に第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区と呼称している。これらの中にあつて石剣が出土した第21号住居跡は、縄文時代の包含層が広がり、さらに同時代の住居跡や土坑のすべてが発見された第Ⅱ区内にある。本住居跡周辺には後期後半の第9号住居跡や第22号土坑が隣接し、これらを取り囲むように、住居構築材が出土した旧河道が鉤の手状に北から南方向へと回り込む。住居跡形状は、長短軸4.3 m×4.2 mを測る隅丸方形で、西壁中央にある第23号土坑としたものは出入口に伴う施設であろう。床面上の4箇所には焼土の分布がみられ、最大は1.1 m×0.6 mの広がりを示す。柱穴の一部からは炭化材が出土しており、焼土の存在と共に焼失家屋であったことを意味する。

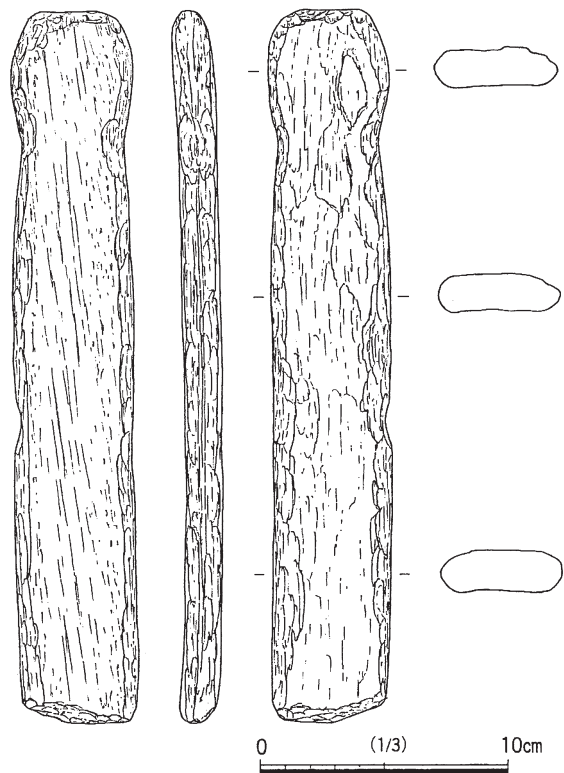
出土遺物は総計2,683点と多量である。土器の出土総数は1,547点で、有文149点(9.6%)、無文1,398点(90.4%)に分別される。文様構成が理解可能なものは意外に少なく、ここでは図示した3点の他に無文の深鉢2点、そして特徴的な文様を示す土器片19点を掲載した。石器の出土点数は1,136点と大量で、中でも尖頭器を含む石鏃及びその未成品や欠損品が57点、石核20点の出土は包含層内出土石器の内容と一致する。これ以外にも搔・削器、石錐、打製・磨製石斧、磨石・凹石、砥石、垂飾品等が37点ある。さらに土版1点、耳栓2点そして中央が穿孔される筒形土製品3点があり、極めて多種多様な物持ちの住居跡であると指摘できる。さらに、これらに今回紹介する石剣が加わるのであるから、その状況は特異とも言えよう。

さて、石剣についてであるが、その出土位置は第1図で示した西壁中央部の出入口北側の壁際である。その出土状況は報告書写真図版12より見て取れるが、柄頭がほぼ床面に接し、剣先が幾分浮いた状態にある。周辺における壁際からの遺物出土状態を観察すると、やはり石剣と同様に住居跡壁際に堆積する第一次埋没土の出土を示しており、これは紛れもなく安行Ⅲb式期の住居跡中央部出土土器群と時間的同一を示している。

4 石剣の観察

石剣は大形礫を分割して獲得したと思われる板状の緑泥片岩を素材としている。片面は分割時の剥離面でやや脆いが、もう一方は片理面を残し硬く、若干凹面となり石の目の方向が観察できる。両端を折った短冊形の素材の周縁を剥離調整し、その後研磨によりエッジを丸く仕上げている。上端から5 cm下の両側縁には幅4 cm、深さ0.5 cmの浅い抉りを施して柄部を作出し、頭部と刃部を不明瞭ながら分離している。頭部と刃部の幅も厚さもほぼ同じで短冊形を呈しており、断面は扁平な丸みのある六角形を呈する。長さ28.1 cm、幅4.7 cm、厚さ1.7 cmで、重さ407 gである。色調はやや明るい緑灰色で銀色に輝いている。

本資料は、同じ縄文晩期に存在する研磨により把頭部と刃部を明瞭に作り出す精製石剣と異なり、表裏面に片理面・剥離面を大きく残していることから未成品とも考えられる。しかし、粗雑ながら周縁を加工し、抉りにより把部の作出が窺えることから、もうひとつ



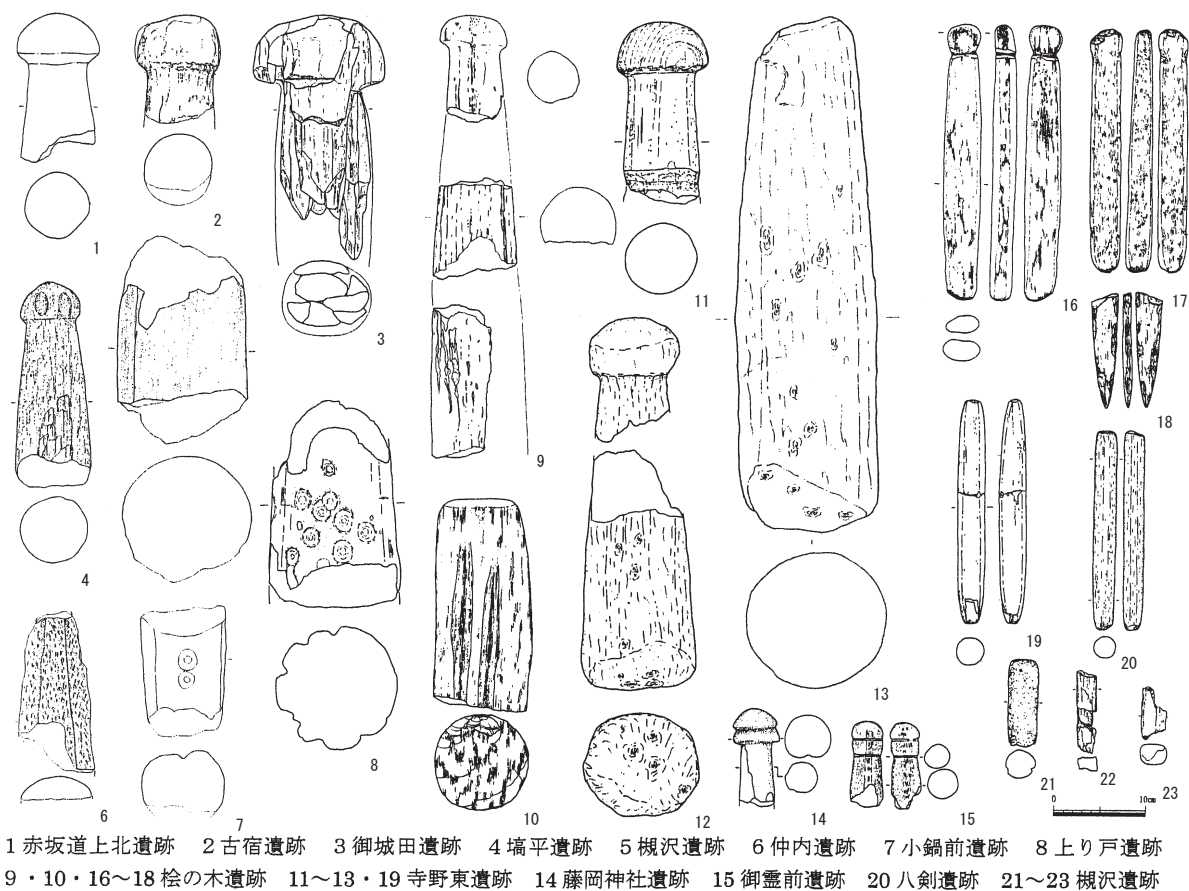
第2図 神畑遺跡の石剣実測図

のタイプの粗製の石剣として捉えることも可能である。

5 栃木県内の緑泥片岩製の石棒・石剣

栃木県内で出土している緑泥片岩製の石棒類には、縄文中期から後期前半の大形石棒と晩期前半の石剣に大きく分けられる。大形石棒は、大田原市片府田富士山遺跡（水野 2012）で阿玉台Ⅳ式期の土坑 SK02 で安山岩製のものが出土しており、中期中葉には出現していたと思われる。緑泥片岩製の石棒（第 3 図）については、中期後半から後期前半に多く、那須塩原市槻沢遺跡 SK-154（5、加曽利 EⅠ式）、芳賀町赤坂道上北遺跡 SK-192（1、加曽利 EⅢ式）、小山市寺野東遺跡 SK546（11、加曽利 EⅢ式）、茂木町桧の木遺跡 B3 号住居跡（9、加曽利 EⅣ式）、B325 土坑（10、堀之内 1 式）、宇都宮市御城田遺跡 SI-70（3、堀之内 1 式）、那須烏山市小鍋前遺跡 SX-01（堀之内 1 式）、鹿沼市明神前遺跡谷部土坑（後期）、芳賀町上り戸遺跡 SI1210（8、加曽利 B1 式）などで堅穴住居跡や土坑から出土している。遺構には伴わないものの茂木町塙平遺跡（4）、宇都宮市古宿遺跡（2）、那須塩原市槻沢遺跡、日光市仲内遺跡（6）などでも出土しており、県内の中期後半から後期前半の各遺跡から一定量出土している。

これらは被熱し破損しているものも少なくなく、御城田遺跡のものは焼け爛れている（芹澤 1986）。上り戸遺跡のものは、多数の凹痕が認められる大形石棒の端部（江原 2005）で、寺野東遺跡谷部（13）や小鍋前遺跡（7）などでも緑泥片岩製の同様の石棒が出土している。完存品は鹿沼市明神前遺跡で後期の谷部土坑から出土した長さ 65 cm の両頭石棒が唯一である（永岡 2002）。これらは出土状況も含め、大形石棒の完存



第 3 図 栃木県内の緑泥片岩製石棒・石剣（縄文時代中期～後期前半）

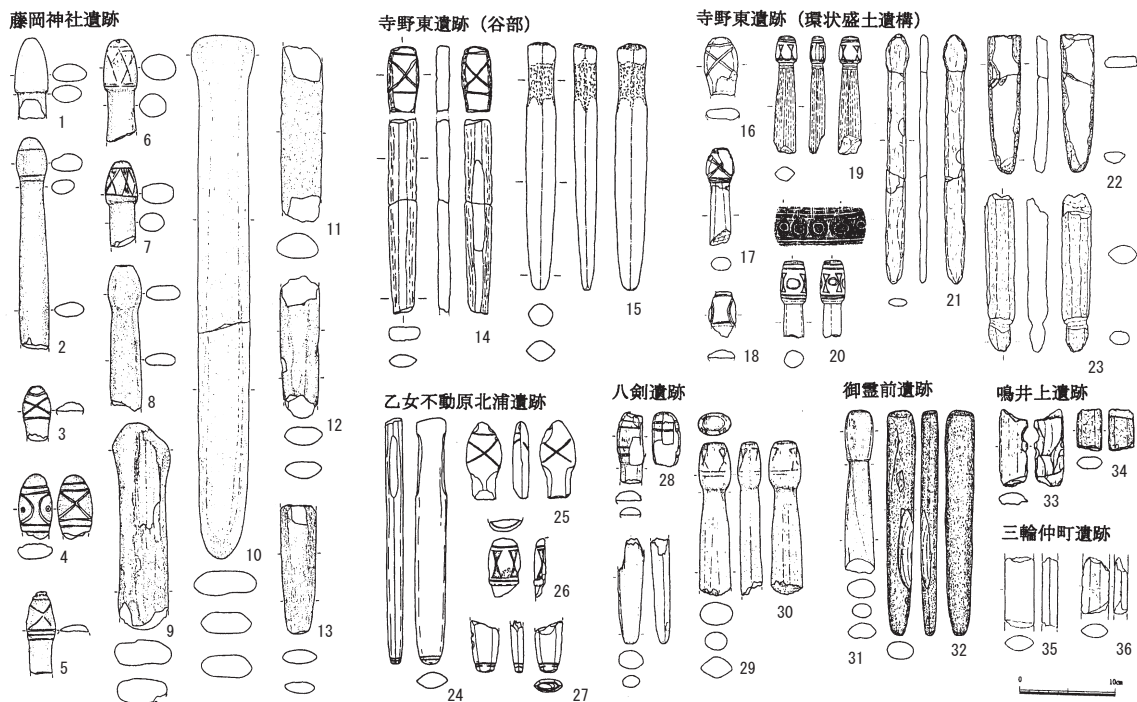
品と破損品の儀礼のあり方を考えるうえで興味深い資料である。

形状については破損品が多く明確ではないが、頭部は赤坂道上北遺跡・寺野東遺跡・御城田遺跡など半球形のものが多く、頭部がやや未発達のものも若干存在する。このほか中形石棒も存在し、二重笠形の頭部が栃木市藤岡神社遺跡(14)で出土しているほか、益子町御霊前遺跡(15)でも中期後葉の住居域から同類の頭部が出土している。

一方、中期後半から後期前葉には緑泥片岩製の小形石棒、石剣が一定量出土している(第3図)。粘板岩製で石材は異なるが、宇都宮市長坂天王寺遺跡の中期中葉阿玉台Ⅳ式のSK04で出土している小形石棒の破片が現段階では最も古い(湯原 2001)。緑泥片岩製のものは、茂木町桧の木遺跡B28号住居跡(16、加曽利EⅡ式)・B279号土坑(17、称名寺式)から、断面が楕円形を呈し溝状の切り込みや側縁をわずかに挟り頭部を作出している長さ25～30cmの完存品が出土している。中期後半と思われる同型の石棒は、石材は異なるが宇都宮市台耕上遺跡、高根沢町上の原遺跡でも出土している。また、桧の木遺跡B16号住居跡(18、称名寺式)では先端が尖る石剣破片と凝灰岩製の大型石棒が伴出している。槻沢遺跡でも加曽利EⅣ式期の竪穴住居跡SI-28・31・68から各1点(21～23)小形石棒の破片が出土しており、SI-31では安山岩製の大型石棒と出土している。なお、詳細は明らかではないが、南那須町曲畑遺跡や宇都宮市板戸不動山遺跡の発掘調査でも小形石棒類が出土している。

一方、後期前葉には断面円形の無頭小形石棒が存在する。寺野東遺跡(19)では堀之内式期の竪穴住居跡SI121から出土しており、同型の完存品は壬生町八剣遺跡(20)でも出土している。また、石材が異なるが、塙平遺跡SI-04(頁岩、堀之内Ⅰ式)、御城田遺跡(輝緑凝灰岩)、古宿遺跡(粘板岩)でも出土している。

このように、栃木県では中期後半から後期前半に半球形の頭部を主とした緑泥片岩製の大型石棒と小形石棒類が併存していたと思われ、県内各地から一定量出土している。小形石棒類は、中期後半から後期初頭のものと後期前葉のものでは形態が異なる。前者は県東部に多く、浅い挟りなどで頭部を作出し、身の断面が



第4図 栃木県内の緑泥片岩製石剣(縄文時代晩期)

楕円状で刃部が不明瞭な石剣状の小形石棒であるのに対し、後者は身の断面が円形で無頭の石棒である。

晩期の緑泥片岩製の石剣は、県南部の栃木市藤岡神社遺跡・小山市乙女不動原北浦遺跡、寺野東遺跡・壬生町八剣遺跡など晩期前葉の時期を中心とした遺跡から多く出土している（第 4 図）。研磨の行き届いた精製石剣と、剥離面や敲打痕を残し研磨の不十分な粗製の石剣がある。精製石剣は、柄頭部に刻線で文様が施されているものが多く、上下 2 条の沈線を巡らすもの（2・28）、×文を施すもの（3・5・14・16・17・25）、×文の間隔が狭くなり対向三叉文（6・7）や I 字文の祖型的なもの（19・20・26・30）などの文様が施されている。刃部は両側縁に明瞭な稜を持つレンズ状のものが少なくない。また、乙女不動原北浦遺跡 2 号土壙墓（24）から、刃部先端に一条の沈線が巡る石剣が北西壁に沿って出土している（三沢 1982）。柄頭部が折損した後、破損部を敲打整形し、刃部上方に敲打で浅い抉りを施し、柄部を作り出している。同様の石剣は寺野東遺跡谷部（15）からも出土している。

一方、粗製ないしは未成品と思われる石剣の出土例は、管見では藤岡神社遺跡（8～13）、寺野東遺跡（21～23）の県南の 2 遺跡のみである。柄頭は若干幅広としたもの、扁平な蛇頭形のものなどがあり、刃部との厚さはほぼ同じで、頭部と刃部の境界は不明瞭なものが多い。

県北東部では、那須烏山町鳴井上遺跡（33・34）・那珂川町三輪仲町遺跡（35・36）などで断面レンズ状の刃部破片が数点出土して程度で、福島県境に近い日光市川戸釜八幡遺跡では粘板岩製の石剣がほとんどで、緑泥片岩製の石剣は検出されていない。益子町御霊前遺跡でも、晩期中葉の SI-09 から未成品を含むたくさんの粘板岩製の石剣が出土しているが、緑泥片岩の石剣は折損部を敲打整形したものが 1 点（32）出土しているのみである。断面は楕円形で、刃部先端には 2 か所の刻みが認められる。なお、刃部先端に刻みを持つ緑泥片岩製の石剣は、高根沢町東谷津遺跡（塩谷郷土資料館所蔵）でも出土している。

このように晩期の緑泥片岩製の石剣は、県南部を中心に濃密に分布しており、藤岡神社遺跡や寺野東遺跡では粗製石剣も一定量認められる。しかし、県北東部では粘板岩製の石剣が主体で、緑泥片岩製の石剣は精製の破片が一遺跡数点出土する程度で、粗製品はほとんど確認されていない。

これらの緑泥片岩製の石剣は、安行 3b 式期を中心とした晩期前半のものが多く、精製品は柄頭部の文様が上下 2 条の沈線→上下沈線間に×文→上下沈線間に対向三叉文→I 字文の変遷が予想され、柄頭部の形態も上端が丸く下端が柄部へ滑らかに移行する蛇頭形から、先端に平坦面を作り下端と柄部の境界が明瞭な形態のものに移行する傾向が窺える。

6 まとめ

足利市神畑遺跡で報告書に掲載できなかった堅穴住居跡から出土した緑泥片岩製の石剣について、本県では数少ない完存の短冊状の粗製石剣であること、出土遺構が明らかで晩期前葉（安行 3b 式）に時期比定できる貴重な資料であることから紹介し、併せて、県内の緑泥片岩製の石棒、石剣について概観してみた。

神畑遺跡の石剣は素材の片理面、剥離面を大きく残し、丁寧な敲打整形や研磨が認められないことから未成品とも考えられるが、粗雑ながら周縁を加工し、抉りにより把部の作出が窺えることから、粗製の石剣として捉えてみた。緑泥片岩の産地は荒川中流域の三波川変成帯、埼玉県北部周辺であり、素材の剥離面や敲打痕を残す緑泥片岩製の粗製石剣は、緑泥片岩の石棒・石剣製作跡として著名な埼玉県深谷市（旧岡部町）原ヶ谷戸遺跡をはじめ、桶川市高井東遺跡など埼玉県を中心とした西関東の遺跡から出土している。このような出土状況から栗島義明は「多くの緑泥片岩製の石棒は原ヶ谷戸遺跡から素材や未成品のままの状態で大宮台地の諸遺跡に持ち込まれたことは間違いなく、その後遺跡を単位として製品へと仕上げられてゆくのが

通例で、完成品での流通が支配的ではなかった」と推察している（栗島 2012）。

神畑遺跡は栃木県の南西端の足利市に位置し、原ヶ谷戸遺跡からは利根川、渡良瀬川を挟むが 30km ほどの距離にあり、県内では石材の原産地に最も近い遺跡の一つである。このような粗製石剣は精製石剣とともに栃木県では栃木市藤岡神社遺跡、小山市寺野東遺跡などで出土していることから、近隣水系の拠点集落までは精製と粗製の二者流通しており、そこからさらに周辺集落へ再分配されたものと思われる。それ以东、以北については、精製石剣がわずかに流通していたものの、粗製石剣は流通しなかったようである。神畑遺跡の緑泥片岩の石剣については、製作遺跡の周辺にのみ流通した粗製の石剣と考えられる。

また、県内の緑泥片岩製の石棒・石剣については、中期後半から後期前半には県内各地で緑泥片岩製の大型石棒が出土しており、さらに県東部を中心に中期後葉から後期初頭に石剣状の小形石棒が、後期前葉には県央から県南で無頭の断面円形の小形石棒が分布していることが明らかとなった。しかし、緑泥片岩のほかにも、大型石棒は安山岩や凝灰岩・砂岩、小形石棒は粘板岩製のものがあり、型式と石材の関係について明確にできなかった。

一方、晩期前半の緑泥片岩製の精製石剣は、柄頭部に施される文様は×文・対向三叉文にほぼ限定される。県内ではほかに晩期中葉に東部を中心に粘板岩製の石剣が流通する。柄頭は上端に平坦面を持つ樽形で、沈線が段状になるものなどがあり、緑泥片岩製のものに比べ柄部との境界が明瞭になる。また、刃部断面は凸レンズ状、四平面が形成され菱形のものなど刃部が明瞭なものも多く、数は少ないが刃部が一側縁を走る刀状のものもみられる。柄頭部に施される文様は、対向三叉文から発展した細い沈線の I 字文がほとんどで、刃部下方にも I 字文や回字文が施され、先端には小さな突起状の瘤がつくものもある。時期は概ね晩期中葉大洞 C1～C2 式頃で、緑泥片岩製の石剣より若干新しい。石剣類が 132 点出土している藤岡神社遺跡では、このような石剣は皆無であり、県西南部で粘板岩製の石剣の出土は少ないことから、見かけ上は県南西部では緑泥片岩製の石剣、県東部が粘板岩製の石剣と地域性ととらえることも可能である。しかし、時間差が存在することから、埼玉県北西部の緑泥片岩製の石剣から栃木県東部の八溝山地から茨城県北部の常陸変成帯の粘板岩製の石剣に製作・流通が移行したととらえた方が妥当であろう。両産地の中間に位置する栃木県では、後期後葉から続く県南西部の多くの遺跡が晩期前葉を全盛として晩期中葉で終焉を迎えるのに対し、県北東部の遺跡の多くが晩期中葉を全盛に晩期後葉まで継続する遺跡が多いことも一因と考えられよう。また、土器も概ね前者の安行系から後者の大洞系に移行しており、興味深い。

参考文献

- 青木健二 1981『芳賀高根沢工業団地内上ノ原遺跡発掘調査報告書』栃木県企業局
- 上野修一 1998『山崎北・金沢・台耕上・関口遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 216 集、栃木県教育委員会・小山市教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 江原 英 1997『寺野東遺跡』V、栃木県埋蔵文化財調査報告第 200 集、栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 江原 英 1998『寺野東遺跡』IV、栃木県埋蔵文化財調査報告第 208 集、栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 江原 英 2001『寺野東遺跡』III、栃木県埋蔵文化財調査報告第 250 集、栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 江原 英 2005『上り戸遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 281 集、栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 栗島義明 2012「緑泥片岩製石棒に見る受給システムー縄文時代後晩期の石棒製品の生産と広域流通ー」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 6 号、埼玉県立史跡の博物館

- 片根義幸 2011『川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 338 集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 合田恵美子 2000『御霊前遺跡』Ⅰ、栃木県埋蔵文化財調査報告第 236 集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 1994『埴平遺跡』Ⅰ、栃木県埋蔵文化財調査報告第 144 集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 1996『槻沢遺跡』Ⅲ、栃木県埋蔵文化財調査報告第 171 集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 2001『御霊前遺跡』Ⅱ、栃木県埋蔵文化財調査報告第 68 集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 2003「刀剣形石製品の起源と系譜－縄文時代前期～後期前半の刀剣形石製品－」『富山大学考古学研究室論集 蜃気楼』秋山進午先生古稀記念論集刊行会
- 鈴木素行 2015「緑泥片岩の石剣－関東地方西部における石剣の成立と展開－」『考古学集刊』第 11 号
- 芹澤清八 1985～1987『御城田』(写真図版編、遺構・遺物実測図編、本文編)、栃木県埋蔵文化財調査報告第 68 集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 芹澤清八 1994『古宿遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 142 集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 芹澤清八 2012『神畑遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 352 集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 塚原孝一 1994『三輪仲町遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 143 集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 塚原孝一 2004『赤坂道上北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 281 集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 塚原孝一 2008『小鍋前遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 313 集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 塚本師也 2001『八剣遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 281 集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 手塚達弥 2001『藤岡神社遺跡』(本文編)、栃木県埋蔵文化財調査報告第 197 集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 手塚達弥 1999『藤岡神社遺跡』(遺物編)、栃木県埋蔵文化財調査報告第 197 集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 中村信博 2006『桧の木遺跡』Ⅱ、本田技研工業株式会社・桧の木遺跡調査団
- 永岡弘章 2002『明神前遺跡－発掘調査概要報告書－』鹿沼市埋蔵文化財報告書第 14 冊、鹿沼市教育委員会
- 三沢正善 1982『乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第 11 集、小山市教育委員会
- 水野順敏・新井 潔 2012『片府田富士山遺跡』大田原市埋蔵文化財調査報告第 1 集、大田原市教育委員会
- 村田章人 1993『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 127 集、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 湯原勝美 2001『長坂天王寺遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 45 集、宇都宮市教育委員会